

このコラムは福祉の職場で働く人を紹介し、仕事や人の魅力を伝えます。
今回登場するのは、入職5年目の永栄さん。やりがいや今後の抱負について聞きました。

＊地域に勇気をもらう

母ひとり子ひとりの生活で、幼い頃から、孤独を感じていました。「おはよう」「おやつ食べべにおいで」。地域の人のなげない声かけで、自分を気にかけてくれる人の存在を感じ、生きる勇気をもらいました。

地域住民として地域活動に熱心に取り組んでいた永栄さんは、「〇歳から100歳まで相談できる場所を作りたい」という理事長の思いに強く共感し、ケアマネージャーから転職。生まれ育った地域で、CSWとして働きはじめました。

＊人生の主人公は自分

永栄さんは、地域の方のあらゆる相談を受け、支援につないでいます。「ミミが片づけられない人、ひきこもりの子どもと精神障がいのある親など、複雑な課題を抱え、孤立している人にも、「人生の主人公として、楽しんで生きてほしい」と、ていねいに寄り添いながら、関係を作ります。

＊地域でともに暮らす

障がいがある原因で大きな音を出してしまうといった住民への相談には、すぐに解決できず、対応に苦慮するこ

ともあります。

しかし、相談があればすぐに対応する、地域の見守り体制を構築することで、誰も排除せず、共に生きる地域を作れるよう日々奮闘しています。

＊人はいつでも変われる

支援していると、人の強さや可能性に驚かされます。

大切にしていることは、一番の応援者になること。本人の希望や夢をひきだすことで、本人自身が自分の力で変わっていく、楽しく地域で暮らしている姿を見ると、本当にうれしく、やりがいを感じます。

＊縁側のおばちゃんになる

子どものころからの夢は縁側のおばちゃんになること。「どんな生きづらさを抱えた人も気軽に会いに行けて、ほっとできるような居場所をつくりたい」。130歳まで生きたい永栄さんの挑戦はこれからもつづきます。



社会福祉法人四恩学園 ふれ愛の館しおん
コミュニティソーシャルワーカー (CSW)
えいよう ゆきこ
永栄 由記子さん

ふくしを巡る

No.19

歴史探訪

警察官と地域福祉

中村三徳の実践(2)

昭和10(1935)年、三徳は大阪毎日新聞慈善団に在職中から構想を練りあげていた隣保事業に取り組むため、「大毎記念中村塾」を八尾の自宅敷地内に開館したんじや。

昭和16(1941)年、戦局が日増しに厳しくなり、住宅難や生活困窮に陥る出兵兵士の家族が増えてくる中、幅広く受け入れていた宿泊事業を母子の宿泊施設(母子寮)としてはっきり位置付けることにしたんじや。

一方で、世間は戦争の激化により救済保護を必要とする人々を対象とした社会事業に対し冷淡になっていき、ただでさえ苦しい経営者は窮地に立たされ事業の休止に追い込まれるようなこともあったんじや。

そういった中でも三徳は「社会事業の積極化と社会事業家の独立自尊」を発表し、社会事業の進むべき道を示唆したんじや。

戦後、女性の労働力への期待が高まる中、昭和21(1946)年、地域の要望に応え、季節託児所を再開。

さらに洋裁技術を学んで就労につながるよう「成美洋裁女学院」を八尾市東表町(現在の本町5丁目)に開校。生徒募集と同時に入学希望者が殺到し、たちまち定員に達したんじや。

その後も、来るもの拒まずの熱意をもって取り組んだ三徳。その精神は、大阪の福祉に今なお深く根づいているのう。



クワロ福



中村三徳の胸像
(社会福祉法人 八尾隣保館)